

### III・子どもの生活環境を考える

# 自閉症児の養育と こころの貧困

—自閉症の子どもは本当にこころが貧困なのか

## 小林隆児

大正大学人間学部臨床心理学科

はじめに

自閉症の診断基準のひとつに「限局した興味や関心」という項目がある。ひとつのこと執着するために、興味や関心が広がらず、その結果としてこころが貧困になってしまう。このような行動特徴は自閉症の障害特性としてさかんに取り上げられ、生涯にわたって持続すると考えられている。ここで考えてみたいのは、自閉症の根拠とされているこれらの診断基準に記された障害特性なるものが、特性といえるような非可逆的なものなのかということである。乳幼児期早期から母子関係になんらかの困難を示す子どもを見てみると、「ひとつのことに執着する」のはなぜか、その理由が見えてくる。そのような行動

は障害特性といえるような「個」の問題ではなく、関係の中で生まれてくる問題なのだということである。

### 形の見えない情動の世界

乳幼児期に子どもが母親に対して「甘えたくても甘えられない」心的状態にあると、その結果、葛藤的になり、それが高じると、さまざまな行動でもって反応を示すようになる。このような状態が続けば、子どもたちは常に心細い状態に置かれるために、異常なほどに強い不安に晒されていく。われわれでもそうであるように、極度に不安な状態に置かれたならば、誰かにしがみついて助けを求め

るが、もしも、しがみつけるような信頼のける人がいない時にはどうするか。人でなく何か形あるもの、それも不変なもの、安定して変化のないものにしがみつこうとするものである。

「甘え」の体験の重要なところは、「甘え」という情動に身を委ね、そこで心地よさを味わうことにある。その体験がみずからの身体に根付くことによって、いかなる心細い事態に直面しようと、それに耐えられるようになる。しかし、「甘え」にまつわる世界が葛藤的で不快な不安を引き起こすものとして体験されるならば、以後、情動の世界に身を委ねることなど耐えられたものではない。これほど不確かで心もとないものはないからである。だからとにかくなんらかの形あるものにしがみつこうとすることがことになる。

### 「変化しないもの」と「変化するもの」

このような理由から、筆者は自閉症といわれる子どもたちが特定の物事にしがみつこうとしてもがくのは、その背後にとつもない不安に晒されているからだと考えている。母子の関係修復を目指す臨床を行っている、次第にそのことが明らかになってくる。治療開始当初は、玩具の縁をきちんと揃

えることに執着していた子どもが、母子関係の深まりとともに、それとはまったく逆に、玩具を積み重ねてはそれが崩れていく様に夢中になっていく。「不変」を好んでいた子どもが「変化」を好むようになる。誰にも頼れない心理状態にあつては、何か「変化しない」ものにしがみつこうとしていたが、母親への信頼感が生まれてくると、「変化する」ものは子どものころを夢中にさせ、好奇心を掻き立てるようになるからである。身の回りのさまざまなものに対して、興味や関心を示すようになるには、母子関係が深まり、心底安心できる気持ちで育まれていくことが先決である。

### 「関係」の問題か、 「個」の問題か

これまで自閉症に限らず発達障害に認められる障害は、「個」の中に閉じられた形で捉えられてきた。いまではその原因を「個」の脳の中に見出そうと躍起になっている研究者も少なくない。もともと、子どもは生まれた時から人間としての心を持ち合わせているわけではない。生まれた後に、母親を初めとする大人たちの養育を通して、次第に人間らしくなっていく。子どものころの問題を考え

る際には、こころがどのようにして育つていくのか、そのプロセスをしつかり捉えていかねばならない。そのためには、「関係」という視点が不可欠である。今さらウイニコットの言を引き合いに出すほどでもないが、乳児は、「個」として存在しているのではなく、母子一組として初めて存在しているようなものなのである。

### 子どもの動きは われわれとの函数である

障害を「個」の中に見ようとすると立場に身を置けば、一見客観的に思える障害特性としてさまざまな行動特徴を列記することになる。先の「限局した興味や関心」などはその代表的なものであるが、わかりやすい例を取り上げてみよう。

ある落ち着きのない子どもがいる。その子どもと大人数名がひとつの部屋で過ごしていると、子どもは大人の誰にも接近できず、かといって部屋から逃げることもできず、部屋の中を動き回っている。一見すると、単に「落ち着きがない」ように思えるが、大人たちとの関係の中で、その行動を見直すと、大人たちが子どもの動きに合わせて動きかけようとするほど、その動きは酷くなってい

く。子どもは誰に対しても近すぎず、かといって遠すぎない距離を保とうとして、懸命に動き回っていることに気づかされる。なぜなら大人たちの接近が子どもにはとても侵入的に映り、子どもの不安を駆り立てるからである。全体の文脈でみてゆくと、子どもの行動の背後にそのような気持ちを感ずることができるようになる。子どものさまざまな反応はわれわれとの関係の中で起こっているものであつて、治療の中で子どもの変化はわれわれとの函数として捉えることが求められるということである。

### 子どものころの「豊かさ」

発達障害といわれる子どもたちの行動を最初から障害特性という色眼鏡で見ると、それともわれわれとの関係の中で見るか、どちらの立場で見ていくかによって、子どものころの世界はまったく異なったものに映る。行動の背後になんらかの意図や動機を感じ取ることができるようになると、発達障害といわれてきた子どもたちのころの世界が「貧困」どころか、その「豊かさ」に目を見張るようになっていくものである。

なぜこのようなコペルニクスの転回が起こるのか。それは関係が変わることによって初

田中千穂子〔著〕

●東京大学大学院教育学研究科教授

# プレイセラピーへの 手びき

## 関係の綾をどう読みとるか

セラピーのなかで何を読みとり、プレイの中でどう返してゆけばよいのか。「専門的な経験に裏づけられた勘」を磨くために、プレイセラピーの機微を、  
ていねいに解説。



■1785円税別／四六判 ISBN 978-4-535-80426-5

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4  
TEL:03-3987-8621 <http://www.nippsy.co.jp/>

めて起こるものなのである。具体的な事例を取り上げてみよう。

ある事例から

K男 初診時三歳一〇カ月

他院で自閉症と診断され、どうしてよいかわからないとの相談であった。振り返ると、一歳過ぎた頃から少しずつ気になることはあったというが、おとなしくて手がからなかったために、三歳になるまで母親は姉の中学受験の勉強に付き合い、K男にはあまり気を配るころのゆとりがなかった。深刻な問題だと気付いたのはつい最近になってからで、通っていた幼児教室の担任にコミュニケーションの問題を指摘されたからだという。

初診時、K男は両親に対してつかず離れず中途半端な距離を保って、玩具を取りに行

ってはすぐに戻り、また玩具のところに行く。そんな落ち着きのない状態で、診察室内を動き回っていた。母親はK男の行動が気になって仕方ない様子で、盛んに注意や叱咤を繰り返していた。

母親の見捨てられ不安

落ち着きのないK男の行動の背後に、筆者は「甘えたくても甘えられない」気持ちを感じ取ったので、母親にK男の行動の意味を説明しながら、過剰な干渉的関与を控えるように助言した。すると母親は少しずつ控えるようになっていったが、K男の遊びに付き合っ

ては何かとつい口を挟まずにはいられない様子だった。そんな母親の関与はK男の遊びを盛り上げるところか、K男が今何をしようとしているか、行動の意図がつかめないままに  
関与しているため、遊びの流れを断ち切つて

しまえばかりだった。伸び伸びと振る舞うようになったK男は、母親が口出しすると、明らかに拒否的反応を示すまでになってきた。すると、なおいつそう母親は口出しせずにいられない。これほどまでに執拗に自分から関わろうとする母親を駆り立てるものは何か、筆者は考えていた。母親は子どものためにと口では言うけれど、筆者の目には母親自身が子どもに拒否されることにいたく反応して、ことさらK男にしがみつこうとしているように見えた。筆者はそこに母親自身の子どもの時代の姿を発見した。そして母親の見捨てられ不安を感じ取った。そこで筆者は母親面接を集中的に行うことにした。その中で母親の子ども時代が想起されるようになった。それは以下のような内容であった。

## 母親の子ども時代の回想

両親と私(母親)、三人で旅行した時には、まるで「強化合宿」みたいだった。予定通りの行動をするようにいつも父親にせかされていた。周囲の人への気遣いからではあったと思うが、常に他人に迷惑がかかるから早くしなさいとせかされていた。もちろん、両親は私たちのためによくやってくれていたと思う。父親は家族思いだが、周りの人たちに気を遣い、旅行の時には予定をびしりと決めて出かけ、少しでも予定に遅れそうになると、私たちをせかしていた。だから私たちにとって家族旅行は「強化合宿」のようなものだった。ゆったりとリラックスして楽しむようなものではなかった。父親がいると背筋を伸ばしていないといけないようで、いつもびりびりしていたというのである。

いつも両親の期待に応えようとして懸命に努力し、自分を叱咤激励してきた母親の子ども時代の姿を彷彿とさせるような内容である。K男に懸命になって関わりとうとする母親を駆り立てていたのは、こうした子ども時代の親子間の体験にあったことが浮かび上がってきたのである。賢明な母親はそのことに気づき始めていた。このような変化が起こってきたのは、この間、筆者がK男に関わる際の母親自身の気持ちを取り上げて確認する

ように心掛けてきたからである。その結果、母親はK男の行動を見ているとなぜか急かしたくなる自分の気持ちに気づくようになった。このような過去の想起から、母親自身も自分の親に対して「甘えたくても甘えられない」気持ちを抱えたままに子ども時代を過ごしてきたことも明らかになったのである。

母親は自分の子ども時代と子どもに関わる今の自分のつながりに気付くようになってから、母親の内省的な態度は深まるとともに、子どもの行動の背後にどのような気持ちがあるのかをとてもよく感じ取ることができるようになった。すると、毎回の面接でこの数週間の心に留まった出来事を記した日記を見せてくれるようになった。そこにはさまざまな感動的ともいえるエピソードが綴られていた。

### こころを打つエピソード

ある日、二人で外出していた時だった。K男がさかんに母親に何か言っているのだが、それがわからなくてどうしてよいか困っていた。先日からへお弁当屋さん、丸くなったとさかんに私に言っていたことを思い出した。即座にはわからなかったが、しばらくしてからその店の看板が変わっていることに気づいた。その看板が丸くなっていた。K男は

そのことを自分に伝えたかったのだとその時初めて気づいた。それが母親にもわかり、ともうれしくなった。K男にそのことを言おうと、につこりしてうれしそうに反応した。

先日家族で旅行に出かけた時のこと。旅館に行くまでの道中、坂道が長かったが、最初K男は「へ歩く!」と元氣よく宣言して張り切っていた。しかし、次第に疲れてきたのか抱っこを要求してきた。母親は、さつき自分で歩くと言っただしよ、と励ました時だった。

K男は穏やかに甘えた口調で、「大きな船はタグボートを運ぶ!」と要求してきた。タグボート(自分)は大きな船(父親)が運んでくれる!」と言いたかったのだ。すぐにそのことがわかり、父親が抱っこをしてくれて無事目的地に到着することができた。

いずれも母親はK男の気持ちの理解できたことを心底喜んでるのがひしひしと伝わってくる内容である。こうして母親はK男の日頃の自助の意味を感じ取ることが容易になるとともに、そのことをK男に伝えることで二人の関係は急速に深まっていった。

### 子どものメタファー的表現

ここでぜひとも取り上げたいことがある。後者のエピソードでK男が語った「タグボート(自分)は大きな船(父親)が運んでくれ

る！』という表現は期せずしてメタファー（隠喩）といえるものとなっている。タグボートを自分に、大きな船を父親に喩えているわけであるが、このような表現がなぜ可能となったのか、そしてそれを母親はすぐに理解することができたのか。

タグボートと自分は小さく、大きな船と父親は大きい。そんな比較をすることができていることがこのせりふには示されている。おそらくこのような喩えは誰かに教えてもらったようなものではなく、K男がみずから思わず発したせりふなのである。このように喩えるものと喩えられるものとを繋いでいるが原初の知覚といわれるものである。両者の底に通じているものが何かに気づく手がかりを得ることを可能にしているのがこの独特な知覚なのである（小林、二〇一〇）。「甘え」にまつわる体験世界に気づくことを可能にしているのも実はこの原初の知覚であることを考えると、「甘え」の体験を母子間で共有することが可能になって初めて、体験がことばと繋がる道が拓かれていくのではないか。

### こころの「貧しさ」と「豊かさ」

乳幼児期に根深い「甘えたくても甘えられない」体験をもった時、その後甘えたい心は

けっして消えることはない。本人の意識にも上らない形で潜在的に息づいているものである。土居（一九九四）はそのことを以下のよう述べている。「甘えた場合とは違う別種の依頼関係が成立する……。：：：甘えられないのであるから、依頼心は満足されていないが、しかし満足を求めるころは持続しているために、相手方の出方に自分の感情が鋭敏になり、結局は自分の気持ち相手が相手によって左右される変態的な依頼関係が成立することになるのである」。その結果、いつも母親（に限らず他人に対しても）の顔をうかがいながら生きていくことになる。「甘え」の問題をずっと引きずりやすい自閉症の子どもたちを見ていると、いかに彼らが周囲他者の言動のひとつひとつに過敏に反応しているかがわかるが、程度の差はあれ、われわれ大人にも同じようなことが起こるものなのである。

子どものこころが「貧しく」なるか、あるいは「豊か」になるか、それは養育する側のわれわれ自身の主体的な関わり如何にかかっているということもできるのである。

〔文獻〕

土居健郎「日常語の精神医学」二九頁、医学書院、一九九四年

小林隆児「メタファーと精神療法」『精神療法』三六巻四号、五一七―五二六頁、二〇一〇年

（こ）ばやし・りゅうじ／児童精神医学